序

法学部教授中村勝範先生は、本年三月をもって定年を迎えられ、慶應義塾を去られる。われわれにとっては、日頃から最も頼りにしてきた先輩との別離のときを意味するわけであり、その想いをこめてここに記念論文集を編み、これを中村教授に献げるとともに、教授の学恩の広さ・深さの一端を世に示すものとして公刊する。

中村教授は、日本の近代政治史および政治思想史に関して、きわめて周到・着実な実証と鋭い理論的分析とによりすぐれた学問的業績をあげてこられたが、それらの業績とならんでわれわれに最も印象深いのは、終始一貫して警世的「正論」を社会に対して主張し続けてこられた教授の情熱の強さである。特に、左翼的思潮がわが国の論壇およびジャーナリズムを支配していた時期に、それらの思潮に堂々と立ち向って行かれたことは、教授が信念と勇気の人であることをあきらかにするものである。そして、今日のソビエト型社会主義体制の崩壊という事実が証明しているように、その信念と勇気は的確な歴史的洞察に支えられているものである。

一方、慶應義塾大学法学部スタッフの一員としては、中村教授はその温厚な人柄と公正なバランス感覚とによって、法学部における人の和の中心をなしてこられた。私のように未熟な後輩は、失意のときに教授にあたたかい声をかけていただいてホッと救われたことが一再ならずある。

法学部在職中の後年には、教授は学部の企画委員長、法学政治学論究編集委員長、人事委員長などの要職に就かれ、それぞれの職務を誠実に遂行してこられたが、特に近年は法学研究編集委員長として『法学研究』の充実・発展に寄与された。本論集が法学研究の一号として公刊されることには、その御寄与に対する謝恩の意義もこめられているものといいうるであろう。

中村先生は、慶應義塾大学法学部教授の地位からは去られるが、新しい理念の下に出発する大学の創設に力を注がれるとのことであって、われわれとしては今後とも先生の人間性・学恩にふれる機会の多くあることが期待される。

先生の一層の御自愛・御健勝を切にお祈りする。

平成七年一月

法学部長　倉沢康一郎